



「もし、ちゃんと聞いていますか？あなた、このようなかわいらしく可哀想な素チンをお持ちの人間の男のあなたにもわかるように説明しているのですよ？」

僕は何を聞かされているのだろう。僕はしがない鬼殺隊の平隊員だ。任務に向かわれたのち連絡が途絶えた蝶柱・胡蝶しのぶ様の捜索の任に任じた二人だ。縫鳥の「コチヨウシノブハイキテイル」という情報に、囚われているなら少しでも早くに開放してさしあげたい……そんな気持ちで他の隊士や隠から一人先行してしまつた結果がこれだ。

へソより上までソリかえつたながうい、あつうい、カリがフ厚うい、えくうい……それについて女の子の肌特有のみずみずしさ……すべてブルブルさが同居する……

そんな鬼の女が携えたイチモツとかいう凡そ理解ができないもの話……

密かにあこがれていた女性の口からそんなことを語られる華奢なカラダに似つかわしくもないもとも大きめに感じられた乳房はさらにパンパンに膨らみツンと上を向き、細く麗しかった腰は、お腹は大きくまるまると膨らんで、それを愛おしそうに撫で上げる……

全てにおいて脳が理解を拒むそんな状況で、一体何があつたのですかと思わず僕が問うたのは当然ではないだろうか。

彼女は何か嬉かつたのだらう。さらに鬼の女との蜜月を詳しく語れるからだろうか。ぼくのイチモツを足で撫で上げながら、しのぶ様は笑顔を咲かせ言葉を紡いだ。



「私は鬼に...あの方に土の字にて拘束されました。あ触手でですよ。一面触手の、まるでなにかのお腹の中といった様相です。最初は私も深い怒りと不快感に包まれました。しかしそれを上回る快楽に包まれてしまったのです。おまんこ♥そしてケツの穴のなかまで...♥体中触手に包まれ...♥このクチの中から何度か深い快楽に無理やり押し上げられました...♥」

愚かなだつたあの頃の私は...そうですね。必死に耐えて...不遜に笑みを浮かべ...何と言つたでしょうか...「これしきのこと鬼殺隊の柱をどうにかできると思ふのか」とか「血鬼術から趣向まで何もかも気味の悪い鬼だこと」と挑発的な態度を崩さぬよう勤めたんですよ。

でも私のいやらしいお豆さん...あれもあの方に言うよう躡けていただいたんですよ。陰核では味気ないですからね。それをツブツブがびつしりの触手でわかれめさんごと反り擦り上げられてはカラダを大きく跳ね上げ...  
...イポイポの生えた茨のような触手やたくさんの舌が生えた球がいくつも連なつた触手倒されてはおほおほと無様な声で鳴き...  
...そして細やかな触手がびつしり生えた回転する触手で徹底的にケツの穴を舐めほじくり乳房を舐めしやぶられ乳首をぞりぞり回し擦り責められ...そして私のおまんこの形に合わせイポの形をグニグニと変える...とんでもない触手おちんぼさんで未熟なおまんこを何日も何日も丁寧に丁寧に開発され続けてしまいましたから...

私はあの時一体どんな顔をしていたんでしょうね?いつ頃まで笑顔を保っていたのでしょうか...そんなこと言われたって僕にわかるはずもない...けど僕はぐちゃぐちゃに笑顔を崩され鬼にその顔を笑われる...そんなじのぶ様を想像してしまいイチモツを硬くしてしまつた...



『もともと鬼の首すら落とせない非力な私ですからすぐに体力は尽き……氣力で踏みとどまるだけの私は遊びの自由度が 甲斐があったとあの方は仰つてました。』

触手さらしと触手ふんどし♥想像がつかますか?おまんこケツの穴に触手が入つて……乳首さんとお豆さんを常に歯のようなツブツブが噛み噛みしてくる下着なのですけど♥』

全く想像出来ないという顔をじていると彼女は『仕方ないですね』『これだから想像力の無い人間は』と言わんばかりに鼻で笑いながら続けた。

『それを履かされた状態で町に放たれました。がんばつて帰ろうと耐えたんですよ?でも蠢く触手の勢いを徐々に徐々に早く強くぐりぐりくされて……開発されきってしまった私のいやらしいカラダは耐えられず倒れこみ♥』

最後は触手にズボンをすられ、触手が挿入つてしまつて見られないトコロを往來の人々にバツチり見られながら……頭が真っ白になるまでイキ果ててしまいました♥』







そんな女の鬼の唇に！その柔らかそうな唇を重ね！舌をからませ必死に貪りお互いの唾液で顔をべちゃべちゃにしながら膣内射精を請うたに決まっているじゃないか……！  
そんな事を考えている僕に彼女はにつこり笑って

『半分正解ですよ♡ぐっちゃぶちよに、媚びるように、ねだるように、私はあの方のお口を囓りました♡でも結局言われたんですけどね♡膣内射精をくださいって♡』

私は鬼を殺すというたくさんの罪を犯しました。鬼を殺した分だけあなたが私を食べてください。私の卵子を貴女の精子で食らってください。おまんこをほじくりイカせたり子宮をこじ開けて精子を注ぎこみ犯したり。

その屈服の悦びに目覚め切った時彼女の罪は許される。  
そんな事を言ったのか。言ってしまったのか。

『そう。言ってしまったんです。そしてイッてしまったんです♡それはもう、深く♡深ああく♡憎かったはずの鬼であるあの方に、未熟ではありますが腰を合わせて、股を開いて調子合せて、チンポ迎えて、子宮開いて♡慎ましいお嫁さんのように♡』

そんな私を見るとあの方は嬉しそうに更にチンポを長く硬くさせ……私をリードして下さい。何度も何度も腰をうちつけ……何度も何度も射精してくださいました……♡』



それからその腹がこんなに大きくなるまで……鬼の仔は成長が速いのか十月十日は経っていないのだが……何か月もそのまんこでちんぽを喰えこみ続ける日々を送りまくわい続けたのだろう

彼女はそんな日々を思い出して股をもじもじ、腰をくねらせ大きなお腹を揺らして昂っている……誇り高き蟲柱は影も形もなく、もう本当に鬼の奥さんになってしまったんだ

そんなことを考える僕のイチモツはガツチガチに硬くなってしまい、昂って早くなっていた彼女の脚は、それに気づいたのかさらに速度を上げる。

「この状況でこんなに硬くて……とんでもないマソチンポさんですね……♡もしかして懂れていましたか？私のこと、自意識過剰でなければ……好きてました？♡」

「あの方専用の蟲柱まんこ……蚯蚓のようにうねりにうねらせるとっても気持ちいいおまんこは使わせてあげられませんの……♡」

「せいぜいこの脚まんこで我慢してくださいね♡まあでもあの方が帰ってきたら殺されて食べられてしまうのにこんなに先走って、私の脚を汚しているドMちんぽには脚で十分……お似合いですね♡」

「ホラ♡いきなさい♡鬼殺隊のはしくれの癖に鬼の嫁に墮ちたみじめなメス豚に踏まれて情けなくイけ♡」

「そうなのだ。俺はこのあと鬼に食われて死ぬのだ……なのに……『人生最後の射精がこの量だなんて(笑)』と笑われ、彼女の足の甲をちよろっと汚したただだが……」

「胡蝶しのぶの脚まんこに存分に射精した僕は、人生最後にして最高の快楽に打ち震えていた……」













